

Title	脱臼位股関節症に対する tectoplasty の遠隔成績
Author(s)	西塔, 進
Citation	大阪大学, 1985, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35080
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・（本籍）	さい 西	とう 塔	すすむ 進
学位の種類	医	学	博 士
学位記番号	第	6978	号
学位授与の日付	昭和60年8月2日		
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当		
学位論文題目	脱臼位股関節症に対する tectoplasty の遠隔成績		
論文審査委員	(主査) 教授 小野 啓郎		
	(副査) 教授 杉本 侃 教授 小塚 隆弘		

論 文 内 容 の 要 旨

(目 的)

二次性臼蓋を形成した脱臼位あるいは高位の垂脱臼位股関節は、思春期から若年成人期に関節症性変化が進行するため、その対策は股関節外科における重要な課題である。しかも若年性ゆえに全人工股関節置換術の適応はなく、また関節が高位に存在するための生体力学的弱点や、骨盤が十分な厚さを持たないために、従来の大腿骨骨切り術やキアリ骨盤骨切り術などの関節温存手術の成績は不満足である。この意味で脱臼位股関節症に対する治療方法はいまだ解決されていないとすべきである。

大阪大学整形外科では昭和36年以来、これら脱臼位股関節症に対して、腸骨の内外板の間でsplitし、この間に同種あるいは自家骨による骨移植を行なって関節外に新たな臼蓋を形成する tectoplasty を施行してきた。本研究では脱臼位股関節症に対する tectoplasty の遠隔成績を調査し、本術式の有用性を検討した。

(方 法)

調査対象は脱臼位股関節症に対して tectoplasty を施行した症例で、5年以上の術後経過を観察し得た24例、27関節である。男3例4関節、女21例23関節で、脱臼位股関節は6関節、高度の垂脱臼位股関節は21関節である。手術時年齢は11才から55才で、術後経過観察期間は5年1カ月から19年6カ月で平均12年7カ月である。

以上の症例に対し、Merle d'Aubigne hip scoreによる臨床評価、X線学的評価、手術効果の持続、合併症および手術成績に影響を与える因子について調査した。

(成 績)

1) 臨床評価：臨床評価では優10関節(37%)，良11関節(41%)，可4関節(15%)，不可2関節(7%)で優良あわせた成績良好例は78%であった。項目別に観ると，関節可動域は術前術後に不変であったが，疼痛，歩行能力は改善され，とくに疼痛の改善が著しい。

2) X線学的評価：Sharp角，CE角，臼蓋骨頭被覆率はいずれも著明に改善し，しかも術直後より最終調査時まで維持されている。経年的なX線像から74%の関節に良好な関節適合性変化が術後に見られた。最近の症例では両股関節のCT scanを施行したが，このCT像では関節の直上にとどまらず関節前後にも新臼蓋が形成されており，この形成臼蓋は骨頭の80%を被覆していた。形成臼蓋の吸収は4関節にとどまる。術前に関節症性変化を持った関節は14関節であったが，5関節にのみ関節症性変化が進行した。

3) Tectoplastyの手術効果の持続：術後5年，10年，15年，18年でのhip scoreの平均値を検討した。術前平均12.7点は術後10年で16.0点と改善し18年でも15.0点と手術効果が持続している。

4) 合併症について：感染などの重篤な合併症はなかった。

5) 手術成績に影響する因子：手術時年齢と関節症性変化の有無が術後成績に関連した。手術時年齢については30才を境として，それ以下の症例では術後成績が良かった。関節症性変化については，術前にそれがないか，あるいは軽度の関節症性変化にとどまるものでは，やはり術後成績が良かった。一方，反対側の脱臼，非脱臼の別，脚長差は術後成績に影響を与えなかった。

(総括)

以上のようにtectoplastyの遠隔成績を臨床的，X線学的に評価した結果，以下の結論を得た。

1. 脱臼位股関節症に対してtectoplastyは有用であり，その手術効果の持続は15年以上にわたり期待できる。
2. Tectoplastyの適応は関節症性変化が軽度で，30才までの脱臼位股関節症である。

論文の審査結果の要旨

二次性臼蓋を形成した脱臼位あるいは高位の亜脱臼位股関節は思春期，若年成人期に関節症性変化が進行するため，その対策は重要な課題である。しかし全人工股関節置換術，骨盤および大腿骨骨切り術などの手術成績は不満足であり，この意味で脱臼位股関節症に対する治療方法は未解決とすべきである。本論文では，脱臼位股関節症に対して施行された，水野の開発になるtectoplasty(骨盤縦割り式臼蓋形成術)を長期followし，X線形態と機能から若年成人に適応されるものか否かを検討した。結果はtectoplastyにより78%の症例に満足できる成績を得られたこと，とくに除痛効果が著しいこと，15年以上の手術効果の持続が期待できること，正確な手術適応が重要なことなどを明らかにした。これによりtectoplastyが脱臼位股関節症に対して信頼できる治療法のひとつとして確立された。よって本研究は学位論文にふさわしいものとする。